

# 相互行為場面における「読むこと」の意味の交渉

## — メディア・ファン・コミュニティに関わる

### 女性へのインタビューの分析から —\*

筑波大学 石田喜美\*\*

#### 1. はじめに

本稿は「読むこと」(reading)の社会的な側面に注目し、「読むこと」の実践の意味が社会的に交渉される相互行為的なプロセスを記述しようとするものである。

北田(2004)によれば、「読むこと」についての社会史的・社会的な研究の言説は大まかに以下の3つの系譜に分けることができる。1つ目は「読むこと」をとりまく文化現象全体に対し歴史学的にアプローチするアナル学派の「書物/読者の社会史」の系譜であり、2つ目はカルチュラル・スタディーズ(cultural studies)の始祖たちによる「読むこと」に対する文化論的なアプローチである「読者(階層)論」の系譜、3つ目は読み手自身が解釈に果たす影響に注目したH.R.ヤウス(H.R. Jauss)やW.イザー(W. Iser)などの「受容の美学」の系譜である。これら3つの系譜のうち、特に「読者(階層)論」の系譜に基づく近年の研究は、エスノグラフィー法によって「読むこと」の実践にアプローチすることで、「読むこと」の意味が社会的に交渉されたものであることを明らかにしている(Radway, 1984; McRobbie, 1991; Cherland, 1994)。しかし、これらの研究はある特定の実践を行う文化そのものに注目し、その文化全体を記述することを目指しており、まさに「いま—ここ」<sup>(1)</sup>において展開される意味の交渉過程については詳細に検討され

ていない。このような意味の交渉過程は、我々が日常的に経験する「読むこと」の意味がいかに生み出され、維持されるのかを考えるために必要不可欠な手がかりである。そのため、「読む」という行為をめぐる意味の全体像を明らかにしていくためには、このような意味の交渉過程を分析する必要がある。そこで本研究では「読むこと」の意味が交渉される「いま—ここ」の場面をエスノメソドロジー(ethnomethodology)の方法論的立場から分析・記述する。エスノメソドロジーとは「人々の」(ethno)「方法の学」(methodology)であり、日常の中で何気なく行われている実践についての「常識」を分析・記述することを目指す。

本稿では特に、「メディア・ファン・コミュニティ」<sup>(2)</sup>(Media Fan Community)に関わる女性たちへのインタビュー場面に注目し、インタビューの相互行為の中で「読むこと」の「常識」が持ち込まれる様子を分析する。ここで「常識」に注目するのは以下の理由による。我々がふだん当然のこととして自明視している「常識」は、実はさまざまな日常的な実践の中でその都度「達成」(西阪, 1997)され、維持されてきたものである。そのため、「常識」は常に崩壊の危機、すなわちそれまでの「常識」が「常識」でなくなるという危機にある。これについては「読むこと」の「常識」も同様である。我々がふだん自明視している「読むこと」の意味やそれに関わるさまざまな「常識」も日常的な実践の中でその都度「達成」されてきたものであり、常に崩壊の危機にある。しかし、このような「読むこと」の「常識」は通常意識されるこ

\* Membership in the media fanzine community: Conversation analysis of reading attitudes.

\*\* ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba)

とはない。「読むこと」の「常識」が「可視化」<sup>(3)</sup>され、それが相互行為の中に持ち込まれるのは、このような「常識」が崩壊の危機に直面する時である。すなわち、それまでの「常識」とは異なる別の「常識」が持ち込まれ、それまでの「常識」が「常識」として機能しなくなるような状況である。このような状況では、これまで自明のものとして疑われることのなかった「読むこと」の意味が「可視化」され、「読むこと」の意味が交渉される。本稿では「読むこと」の意味の交渉に注目するため、このような状況、すなわち、「読むこと」の「常識」が危機に曝され、「読むこと」の常識が相互行為の中に持ち込まれる状況に注目する。

分析の焦点となるのは、相互行為の中で用いられる「マニア」というカテゴリーである。「マニア」というカテゴリーは、「常識」的には否定的なイメージを持つカテゴリーであるが、それと同時に、「マニア」というカテゴリーは当事者が自分たち自身のあり方を基点として「内」側から創造したカテゴリーでもある(Bacon-Smith, 1992)<sup>(4)</sup>。以下、この点について説明する。

「マニア」というカテゴリーは、「オタク」と同様、メディア・テキストの愛好者に対し、「外」側の人間が付与したカテゴリーであり、例えば「幼稚」「まがいの者」「オリジナルのなさ」「性的不能」などのネガティブなイメージを持つ(小林, 1996)。そのため、「マニア」というカテゴリーを付与された者は、これらのネガティブなイメージを直接付与されることになる。このような意味で、「マニア」というカテゴリーは「スティグマ」(stigma)(ゴッフマン, 2001)であると言うことができる。「スティグマ」とは、社会の中でマージナルな側の成員に付与されるもので、「望ましくない」「汚らわしい」として他人の蔑視や不信を受けるような属性のことである。

しかし「マニア」というカテゴリーは、「外」側から強制された「スティグマ」であると同時に、当事者が「いまーここ」にいる自分自身を起点として「内」側から創造したカテゴリーでもある。このような「内」側か

らのカテゴリー化の実践について、サックス(1987)は「自己執行カテゴリー」(self-enforced category)として説明している。サックスは十代の若者に対して「外」側の大人たちが強制した「ティーン・エージャー」というカテゴリーと、十代の若者自身が自分たち自身の生活の場で作り上げ、自分たち自身を他の人々から区別するために創造した「ホットロッダー」というカテゴリーを比較し、後者のカテゴリーを「自己執行カテゴリー」と呼ぶ。すなわち「自己執行カテゴリー」とは、社会で支配的な文化の中で「外」側から強制されようとするカテゴリーを無効化し、自分たちの存在を「内」側から正当化していくようなカテゴリーである(好井, 1991, p. 127)。本論では「マニア」というカテゴリーが、「外」側から強制された「スティグマ」であると同時に、「内」側から創造された「自己執行カテゴリー」でもあるという事実に着目して分析を行う。

「マニア」というカテゴリーが相互行為の中に持ち込まれることで、「読むこと」に関する「常識」的な視点が持ち込まれるとともに、その「常識」的な視点を相対化するもう一つの視点、すなわち「マニア」である当事者の視点が持ち込まれることになる。本稿では、このような複数の視点が相互行為に持ち込まれ、利用され、語り手である二人の女性の「読むこと」の意味が交渉される過程を明らかにする。

## 2. 方法

### (1) 調査協力者

本稿では、「メディア・ファン・コミュニティ」に関わる女性2名に調査協力を依頼した。表1に調査協力者のプロフィールを示す。調査協力者2名はともに、大学を卒業し、現在は社会人である。小・中学校は異なるが、同じ高校に通い、高校では同じ文系の部活動に所属していた。その後、別々の大学に進学した後、現在に至るまで友人としての関係が続いている。また、高校時代から現在まで、それぞれが趣味の一環として集めた本や音楽などの貸し借りを行っている。

表1 調査協力者のプロフィール

| 項目       | 佐藤じゅんこ (仮名)   | 中野はるみ (仮名)   |
|----------|---|--|
| 学 歴      | 大学卒業  | 大学卒業   |
| 同人誌との関わり | 同人誌即売会に参加して同人誌を買った経験がある(中学～高校)<br>同人誌を書いた経験がある(高校)<br>創作文芸のサークルに参加している(現在)                    | 友人から同人誌を借りて読んだ経験がある(中学～高校)   |
| 読書歴      | 絵本(5・6才)→「日本の文学もの」(小3)→「児童向けのノンフィクション」(小4・5)→少女小説(中学生～現在)→「新本格(ミステリー)」(中学生～高校生)→「翻訳もの」(大学入学後) | 絵本(2～5才)→『ノンタン』『こわい話』『スーパーばあちゃんの冒険』(小学生)→読書部に入るがほとんど何もしない。小説を読まなくなり、柴田亜美をきっかけにマンガばかりを読み始めるようになる(中学生～現在)→何でも読むようになる(高校生～現在) |

(2) 調査方法

本研究では2004年2月に90分程度のインタビュー調査を実施した。

このインタビューでは、インタビューに関わる調査協力者の心理的負担を軽減するため、調査協力者2名の同席を許可している。

インタビューでは、インタビュー場面で展開される相互行為の「シークエンス」(sequence) (フリック, 2002) を分析するため、調査協力者に自由に語ってもらうことを原則とした。しかし、インタビューを円滑に行う必要上、事前に調査者の方で①「読書一般」に関わる5項目と、②「同人誌」<sup>(5)</sup> (Fanzine)に関わる14項目から成るインタビュー・ガイドを準備した<sup>(6)</sup>。

なお、インタビューは調査協力者2名の許可を得た上でテープ録音を行い、これと平行して、調査者によるフィールド・ノートの記録を行っている。

(3) 調査者

調査者と調査協力者は5年以上前からの友人である。また、調査者自身も以前から「メディア・ファン・コミュニティ」に積極的に関与しており、その情報は調査協力者の二人も間接的に知っていた。しかし、インタビュー全体を通して親密な関係が継続したわけではない。録音されたインタビュー・テープの中には「調査者」—

「調査協力者」という関係性を意識している場面がしばしば出現する。

(4) 分析方法

録音したインタビューをすべて文字化し、これをもとに分析を行う。「マニア」というカテゴリーが用いられる状況を明らかにするため、「マニア」という言葉が登場する相互行為の分析を行う。これによって、「マニア」というカテゴリーを用いることで何が行われているのかを明らかにする。なお、インタビュー全体を通して、「マニア」という言葉が用いられたのは計4回である。4回のうち2回は発話者以外の者を示す言葉として「マニア」が用いられており、その他の2回は発話者が自分を示す言葉として「マニア」が用いられている。本稿では特に、後者の場面、すなわち自分自身を示す言葉として「マニア」を用いる場面に注目する。その意図は、語り手自身が自分自身の「読むこと」の実践を意味づける場面に焦点を当てることにある。

3. 相互行為における「マニア」カテゴリーの使用

以下、「マニア」という言葉が発話者自身を示す場面について、実際の会話データをもとに考察する。

(1) スティグマとしての「マニア」の利用

事例1は、じゅんこ(仮名)が大学入学後「心機一転」

【事例1】じゅんこ：「心機一転」

(・・・前略) (大学に入学後「心機一転」し、「翻訳もの」を読み始めたというじゅんこの語りに対して)

1-1 インタビュアー (以下, I) : ね, こ, こ, こ, ここの断絶はいったいなにで生じてるんですか?

1-2 じゅんこ (以下, J) : いやー。だからー。す, 大学に入るにあたってー

1-3 I : うん

1-4 J : なんかー。ほ新本格とかティーンズ文庫とかってまあいい, 小説としては, よ, おもしろいと思うんですけどー

1-5 I : うんうん

1-6 J : なんか人にこういうの読んですよって言えないところもあるじゃないですかー。

1-7 I : うん

1-8 (・)

1-9 J : マニアックすぎるところがあって, だからもう少し人になんか読書でこういうものを読んですよと言えるものが読みたいなって思いはじめてー

1-10 I : うーんうん

1-11 (・)

1-12 J : で, (・) ポール・オスターとか読むようになったんですけどよくかんがえるとサリンジャーも人前で話せない人もかもしれないっていうのはありますね。

1-13 I : ま確かにね。うーんうん。

して、それまでは読まなかった「翻訳もの」(海外の文学作品)を読み始めた、と述べた直後に調査者がその理由を質問したところである。それまでじゅんこは、「新本格」(ミステリー小説)や「ティーンズ文庫」(少女小説)などのポピュラー小説について熱っぽく語っていた。そのため、インタビュアーは語られる内容の「断絶」を疑問に思い、じゅんこにその「断絶」の理由を尋ねている。

1-4 から 1-6 では、「新本格」「ティーンズ文庫」から「翻訳もの」への移行についての説明が行われる。ここで理由として持ち出されているのは、「人にこういうの読んですよって言えない」(1-6) ことである。ここでじゅんこは「人」という言葉で示される「常識」的な他者の視点を導入する。また、そうすることによって、「常識」的な視点を備えた人間としての「自己」を示す。そして、その「常識」的な立場から、それまでに語られた「自己」、すなわち「新本格」や「ティーンズ文庫」を「おもしろい」と感じそれらに没頭する「自己」を「人に言えない」(1-6) と評価する。しかし、調査者はこのような説明では完全に納得することができない。その

ため、じゅんこの説明に対し、あいづちのみで応答し(1-7)、彼女に対してさらに詳しい説明を要求する。しかしじゅんこはこの要求に応じることができず、沈黙が生じている(1-8)。「マニアック」という言葉は、この沈黙の後、聞き手である調査者がすぐに納得できるような説明として持ち出される(1-9)。しかし、「マニアック」という言葉が持ち出されたにも拘らず、理解が達成されないため、再び沈黙が生じてしまう(1-11)。

ここで重要なのは、じゅんこが会話上の危機に立たされた場面で「マニアック」という言葉が用いられているという事実である。ここで「マニアック」という言葉は会話上の危機を回避するために用いられている。

この場面では、スティグマとしての「マニア」が利用されている。「常識」的な視点を持つ「自己」を示そうとするじゅんこは、それまでに語られた「自己」にスティグマを与えることで、「いまーここ」で語る「自己」とそれまでに語られた「自己」とを切り離す。そして結果的に、「マニア」である「自己」は、「いまーここ」にいる「自己」と無関係な、「過去の自己」として提示される。これは、「マニア」というカテゴリーが当事者で

はない「外」側から与えられたスティグマだからこそ可能になる。すなわち、あえてスティグマとしての「マニア」を持ち出すことで、「いまーここ」にいる「自己」は「マニア」でない「外」側の人間であるということを示すことができる。

つまり、ここで「マニア」というカテゴリーは「いまーここ」にいる「自己」とそれまでに語られた「過去の自己」とを切り離すために用いられている。また、このことによって、「いまーここ」の「自己」がこれから語ろうとする「読むこと」の実践を、「過去の自己」の行ってきた実践とは異なる実践、すなわち、「人に言うことのできる」実践として位置づけることが可能となる。

## (2) カテゴリーの自己執行

次に、「マニア」というカテゴリーを自己執行 (self-enforcement) する事例を検討する。事例1では「マニア」というスティグマを、それまでに語られた「自己」に適用することで、「いまーここ」で語る「自己」を「マニ

ア」でないものとして示していた。ここで検討する事例は、「いまーここ」にいる「自己」を「マニア」としてカテゴリー化する事例である。以下の事例は、はるみ(仮名)の好きな柴田亜美<sup>7)</sup>作品の「愛蔵版」に話が及んだところである。

2-2 から 2-9 までにはるみの語りは一度完結している。しかし聞き手である調査者は、はるみの語りを解釈できずに 2-10 で語りの意味を聞き返す。そこで、はるみは聞き手が自分の語りを解釈できるよう、「常識」的な視点からの評価を加えて語り直しを行う (2-11)。「～しまっている」という否定的な表現をあえて用いることによって、これまでの語りは「常識」的な視点から対象化される。すなわち、この時、はるみは聞き返しを行った調査者が「常識」的な立場に立っていることを想定して語り直しを行ったということが出来る。

はるみによって語られた経験、すなわち、「内容が同じであっても新装版が出版されれば買う」という経験は、「常識」的な視点から見れば「異常」な行動である。し

## 【事例2】はるみ：「愛蔵版」

- 2-1 インタビュアー (以下、I) : もしかしてー、あの一、愛蔵版買った？
- 2-2 はるみ (以下、H) : 愛蔵版、わー、その頃は、買わなかったんでー、
- 2-3 I : うん。
- 2-4 H : しょうがないからー、
- 2-5 I : うん。
- 2-6 H : 古本やで買っ、ね愛蔵版にもならないようなボロボロなやつだけは一応手に、あるんですよ。
- 2-7 [ ]
- 2-8 I : うん ふーーん
- 2-9 H : でそのあとさらになんか、新しいのがやるにあたって出たーやつを、一応、おってる。
- 2-10 I : え、なに。新しいのがなに？
- 2-11 H : 新しくー、新装ででたのもー、さらに買ってしまっている＝
- 2-12 I : =なにやってんすか。
- 2-13 じゅんこ : ウフフ
- 2-14 H : いやーハハハ、それがマニアなんです。
- 2-15 I : いやー、え、すごいよ。
- 2-16 [ ]
- 2-17 H : そういうことするのがマニアック。

かし、彼女自身にとってこの行動は特に意味づける必要のない「あたりまえ」な行動であったと考えられる。それにも関わらず聞き手である調査者が、はるみにとっては「あたりまえ」の内容の語りに対して聞き返しを行ったため(2-10)、はるみは聞き手に解釈ができるよう、同じ内容を「常識」的な視点から語り直す必要があった。「常識」的な視点とは、はるみの「あたりまえ」の語りを否定的に表現し、「マニア」というスティグマを付与する視点である。はるみは「～しまっている」という形で自身の経験を語り直すことによって、「マニア」というスティグマの存在を顕在化する。そして「マニア」というスティグマが語り手と聞き手双方に顕在化することで、聞き手である調査者の理解が「達成」される(2-12)。

また2-12では、調査者によって理解が達成されたことが示されるだけでなく、はるみの経験が「異常」な行動であることが指摘される。さらにこの指摘はじゅんこの笑い(2-13)によっても支持される。このような相互行為の中で、それまでのはるみの語りが「異常なもの」として括られようとする時に「マニア」という言葉が用いられる(2-14, 2-17)。

ここでも事例1と同様、「マニア」という言葉は会話上の危機を回避するために用いられている。ここでの会話上の危機とは、はるみ自身の示そうとする「自己」の危機ということができる。すなわち、はるみ自身が語ることによって構築してきた「自己」が、聞き手である調査者やじゅんこによって持ち込まれた「常識」的な視点によって否定的に意味づけられ、崩壊させられてしまうという危機である。はるみは2-9まで自分自身の経験を語ることで、ある特定の「自己」を構築してきた。しかし、その「自己」が調査者とじゅんこの持ち込む「常識」的な視点によって、否定的な評価を受ける危機に曝されてしまう。そこではるみは、「マニア」という言葉を用いることで、調査者とじゅんこが持ち出した「常識」的な視点に対抗し、それまでの語りの中で構築された「自己」を保持しようとする。

2-9までに構築された「自己」は、たった一人の個人的な経験の語りによって構築された「自己」であり、「常識」的な視点の前には批判され、消し去られてしまう存在である。しかしここで「マニア」という言葉を用い、「自己」を「マニア」としてカテゴリー化することで「常識」的な視点を回避することができる。なぜならば、「自己」を「マニア」としてカテゴリー化することは、「自己」を「マニア」という一つのコミュニティの成員として位置づけることになるからである。このとき、「常識」的な視点は、「マニア」というもう一つの(alternative)文化の視点の下に相対化される。つまり、複数の文化の存在が「可視化」されることで、「常識」的な視点によって持ち込まれた「通常」-「異常」という軸が無効化される。そのため、結果的に「自己」の危機的状況は回避され、さらに、「いやー、え、すごいよ」(2-15)という肯定的な評価がなされる。

このように、事例2において「マニア」というカテゴリーは、語り手の「自己」を消し去ろうとする「常識」的な視点を回避する機能を果たす。また、もう一つの文化の存在を可視化することで「常識」的な視点による判断を無効化する。すなわち、「マニア」というカテゴリーは、「外」側の圧力から、語り手の「自己」を守るシェルターとしての役割を果たしていると言える。

#### 4. 考察

本稿では、「外」側から与えられた「マニア」というカテゴリーを利用して「自己」を構築する事例と、「マニア」カテゴリーを自己執行し、「内」側からカテゴリーの意味を与える事例を検討した。これらの事例で共通していたのは、「マニア」というカテゴリーが会話上の危機を回避するために用いられていることである。それぞれの事例において、会話上の危機の具体的な様相は異なるが、どちらの危機も、「常識」的な立場と「マニア」の立場とが衝突する場面において、語り手自身の「自己」の危機として生じていた。「マニア」カテゴリーは、このような危機的状況、すなわち、「常識」的な視点と

「マニア」の視点の両方を持つ語り手の「自己」が危機的な状況になった場合に用いられる。そして、「マニア」カテゴリーは「常識」的な立場と「マニア」の立場の関係を再組織化することによって、このような危機的状況を回避させる機能を持つ。

また、このような再組織化が生じることによって、語り手自身の「読むこと」の意味が作り出される。例えば、事例1では「マニア」として語られた「過去の自己」と「いま-ここ」にいる「常識」的な「自己」とを切り離すことによって、「いま-ここ」にいる語り手の「読むこと」の実践を「人に言える」実践として意味づけていた。また事例2では、まさに「いま-ここ」にいる語り手を「マニア」としてカテゴリー化することによって、それまでに語られた「読むこと」の実践を、「マニア」のコミュニティの文化的実践として意味づけていた。

このように「マニア」というカテゴリーを相互行為の中でどのように用いて「自己」を位置づけていくかという問題は、自分自身の「読むこと」の実践をどのように意味づけるかという問題と関連する。そして、このような相互行為的な過程の結果として、「読むこと」の実践の意味が、その都度、創造されていく。またその結果として、「読むこと」の実践の意味は維持されていく。このように、我々がふだん何気なく用いる「読むこと」の意味は、さまざまな相互行為的な過程の中で、その都度「達成」されたものだと考えられる。

## 5. まとめ

「読むこと」の実践の意味は、会話を含むさまざまな相互行為の中で作り出され、維持される。本稿では特に、「自己」のカテゴリー化による「読むこと」の実践の意味づけについて検討したが、この他にも「読むこと」の実践をめぐるさまざまなカテゴリー化の実践がふだん何気なく過ごす日常の中で行われている。

「読者(階層)論」の系譜に基づく多くのエスノグラフィ研究は、「読むこと」の意味がある特定の社会・文化の構造の中に位置づけられていることを明らかにし

た。すなわち、社会・文化の構造が「読むこと」の意味を決定する、という「読むこと」の意味の側面である。これに対し、本稿が明らかにしたのは、「いま-ここ」での相互行為の中で「読むこと」の意味が交渉され、それが社会・文化の構造に影響を与えていくという側面である。これらの関係を図示すると以下ようになる。

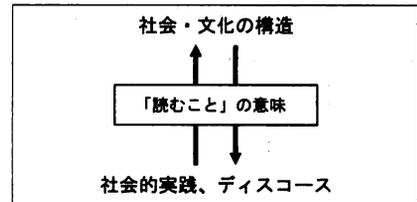


図1：「読むこと」の意味をめぐる全体像<sup>(4)</sup>

今回明らかにしたような「読むこと」の意味の交渉はこのような全体像の中で捉えられる必要がある。そして今後は、このような「読むこと」をめぐる意味の交渉過程をさらに明らかにしていくことで、我々が「あたりまえ」に理解している「読むこと」の意味を問い直し、新たな「読むこと」の可能性を見出していくことが課題となる。今回は「読むこと」の「常識」が変化していく過程を検討することはできなかったが、「読むこと」の意味の可能性を見出していくために、そのような「読むこと」の「常識」の変化を分析し、明らかにしていくことも必要である。

また、本稿ではエスノメソドロジーの方法論的立場から「読むこと」の意味が交渉される過程そのものに着目したため、「読むこと」の実践に対する当事者の主観的な意味づけを明らかにすることはできなかった。しかし「読むこと」の意味の全体像を把握する上で、個々人が主観的に「読むこと」に見いだしている意味を明らかにすることは重要である。そこで今後は、「読むこと」をめぐる当事者のライフストーリーを分析することによって、「読むこと」の実践を行う当事者がどのように「読むこと」を主観的に意味づけ、それは生涯の中でどのように変化するのかを明らかにすることが課題となる。

注

- (1) 「いまーここ」という用語は山田・好井(1991)を参考にした。
- (2) 「メディア・ファンダム」(Media Fandom ; 本稿の「メディア・ファン・コミュニティ」に相当)について、小林(1996)は「メディアを媒介にして、メディア資源を利用しながら何らかの生産活動をおこなっているファンおよびその集まりとその活動」と定義している。「メディア・ファン・コミュニティ」に属する人々は、アニメやマンガ、小説、ゲーム、映画、音楽、スポーツなどさまざまなメディア・テキストの中のあらゆる要素に過剰な愛着を持ち、そのメディア・テキストの「パロディ」を何らかの形で表現する。いわゆる「同人誌」(Fanzine)はこのような表現の代表と言える。
- (3) 本稿において「可視化」とは、社会的に観察可能、説明可能なものにする、実践に参加するメンバーが相互に理解可能なものにする(上野, 1999)を意味する。
- (4) Bacon-Smith(1992)は、「メディア・ファンジン・コミュニティ」(Media Fanzine Community ; 本稿の「メディア・ファン・コミュニティ」に相当)において、ファンのあり方を示す2つの用語が存在することを指摘している。一つはファンであることをステイグマとして示す用語("fijagdh")であり、もう一つはファンであることを1つの生き方として示す用語("fiawol")である(pp. 284-285)。

表2：インタビュー・ガイド

|      |                   |    |                                    |
|------|-------------------|----|------------------------------------|
| 読書一般 | 読書の個人史            | 1  | 自分の楽しみのために読書をはじめたのはいつ頃からですか？(開始)   |
|      |                   | 2  | その後、自分が読む本がどのように変わったか教えてください(本)    |
|      |                   | 3  | 本を読むのは、いつどのような時でしたか？(状況)           |
|      | 現在の読書活動           | 4  | 現在はどのような本を読んでいますか？(本)              |
|      |                   | 5  | 現在はいつどのような時に本を読んでいますか？(状況)         |
| 同人誌  | 同人誌の定義            | 6  | 同人誌の定義を教えてください(定義)                 |
|      | 同人誌の個人史<br>(開始)   | 7  | 同人誌の存在を知ったのはいつですか？(知る)             |
|      |                   | 8  | 同人誌をはじめて読んだのはいつですか？(読む)            |
|      |                   | 9  | 同人誌をはじめて読んだ時はどのような状況でしたか？(状況)      |
|      |                   | 10 | 同人誌をはじめて読んだ時どのような感想をもちましたか？(感想)    |
|      | 同人誌の個人史<br>(現在まで) | 11 | その後、どのような同人誌を読みましたか？(同人誌)          |
|      |                   | 12 | いつも、どのような時にどのような場所で同人誌を読みましたか？(状況) |
|      | 現在の同人活動           | 13 | 現在はどのように同人誌に関わっていますか？(活動)          |
|      |                   | 14 | 現在はどのような同人誌を読みますか？(同人誌)            |
|      |                   | 15 | 現在はどのような時にどのような場所で同人誌を読みますか？(状況)   |
|      | 同人誌の好み            | 16 | 好きなストーリーのパターンを教えてください(好き)          |
|      |                   | 17 | 嫌いなストーリーのパターンを教えてください(嫌い)          |
|      | 同人誌の交流            | 18 | 他の同人活動に関わる人をどう思いますか？(他人)           |
|      |                   | 19 | 同人誌即売会に参加することについてどう思いますか？(即売会)     |

- (5) 「同人誌」とは「メディア・ファン・コミュニティ」のコミュニケーションにおいて中核的な役割を果たす自費出版誌である。注(2)を参照。
- (6) インタビュー・ガイドは表2の通りである。なお、このインタビュー・ガイドはRadway(1984)を参考にして作成した。
- (7) 柴田亜美とは、少年マンガを中心に作品を発表している女性のマンガ家である。代表作品に『南国少年パプワくん』がある。柴田亜美は少年マンガだけでなく、作家自身の日常生活をテーマとしたエッセイ・マンガを多く発表しており、「柴田亜美」という作家自身の存在がファンの間で独特の意味を持つことに特徴がある。
- (8) 図1は中村(2001)によるFairclough(1989)の図を参考にして筆者が作成した。
- 文化政治学】せりか書房。
- 小林義寛(1996). from Folk to Filk — 「密猟的文化」あるいは草の根の創造活動の可能性へ向けて. 生活学論叢, 1, 97-106.
- MCROBBIE, A. (1991). *Feminism and youth culture: From Jackie to Just Seventeen*. London: Macmillan.
- 中村桃子(2001). 『ことばとジェンダー』勁草書房。
- 西阪仰(1997). 『相互行為分析という視点』金子書房。
- ブラマー, K. (著). 桜井厚・好井裕明・小林多寿子(訳)(1997). 『セクシュアル・ストーリーの時代—語りのポリティクス』新曜社。
- RADWAY, J. (1984). *Reading the romance: Women, patriarchy and popular literature*. London: Verso.
- サックス, H. (1987). ホットロッダー—革命的カテゴリリー. 山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳編『エスノメソドロロジー—社会学的思考の解体』(pp. 19-38), せりか書房。
- 桜井厚(1996). 戦略としての生活—被差別部落のライフストーリーから. 栗原彬編『講座差別の社会学第二巻 日本社会の差別構造』(pp. 40-64), 弘文堂。
- 桜井厚(2002). 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 上野直樹(1999). 『仕事の中での学習—状況論的アプローチ—』東京大学出版会。
- 山田富秋・好井裕明(1991). 『排除と差別のエスノメソドロロジー <いま—ここ>の権力作用を解説する』新曜社。
- 好井裕明(1991). 「障害者」という自己執行カテゴリリーの挑戦. 山田富秋・好井裕明編著『排除と差別のエスノメソドロロジー <いま—ここ>の権力作用を解説する』(pp. 117-148), 新曜社。

## 引用文献

BACON-SMITH, C. (1992). *Enterprising women: Television fandom and the creation of popular myth*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

CHERLAND, M. R. (1994). *Private practices: Girls reading fiction and constructing identity*. London: Taylor & Francis.

FAIRCLOUGH, N. (1989). *Language and power*. Longman.

フリック, U. (著). 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳)(2002). 『質的研究入門—人間の科学>のための方法論』春秋社。

ゴッフマン, E. (著). 石黒毅(訳)(2001). 『ステイグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』改訂版, せりか書房。

北田暁大(2004). 『意味への抗い—メディアエーションの

# Membership in the Media Fanzine Community: Conversation Analysis of Reading Attitudes

ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba)

## SUMMARY

Avid readers of a particular genre of writing may find themselves stigmatized for their reading habits. Terms such as 'maniac' or 'mania' may be used to describe such people and their behavior. How do the stigmatized readers respond? How do they feel about the genre and about themselves as people considered fanatical by others? This article reports the results of an analysis of a conversation in which members of a particular community of practitioners discussed the meanings of terms associated with their reading habits and with them as readers. Specifically, this study looks at members of the media fanzine community—a community of people who read, write, and share information on a specific topic—and their stigmatization.

Subjects were two female Japanese university graduates who could be described as members of the media fanzine community. Together with the researcher, who was also a self-described member of the same community and with whom the subjects were previously acquainted, they met informally for a discussion. During the course of conversation, the researcher guided discussion toward the meanings of the terms associated with their reading habits. Other than encouraging discussion of these terms, the conversation was not controlled in any way; the three women spoke openly about their favorite books and fanzines. The 90-minute conversation was tape-recorded for later analysis. The researcher also took notes.

Drawing on ethnomethodology, conversation analysis was performed in order to determine the women's general stance toward being media fanzine community members. Analysis focused on the meaning and sociological implications of the women's use of the term 'mania'. It was suggested that when a person is considered to be 'maniac', he or she is stigmatized, creating a negative connotation. However, by embracing the term, the negative connotation is neutralized in the minds of the stigmatized individuals. By identifying themselves with the term, they create a self-enforced category.

The term 'mania' or 'maniac' was used by the subjects when they felt a conflict between their own reading habits and the general public's attitudes. For instance, suppose they were still fans of comics when they entered university. When they realized the gap between conventional thinking (i.e. college students should read material of higher literary merit) and their own reading habits at that time (i.e. avid reading of comics), they used the term 'mania', and they can conceptualize this gap in daily activities like conversations. The findings of this study suggest that the meaning of reading is created and maintained in our daily activities. Traditional reading studies typically proceed on the notion that meaning derives from society and culture. This study suggests that daily activity may also play a role and is thus a legitimate focus for further reading research.